

研究論文の審査の観点について

審査委員長
菊池 龍三郎

今年度は応募本数が117篇と始めて100を大きく超えました。最終的に本論文集に掲載されている方々が受賞されました。いずれも現場の実践の向上に役立つであろうと確信できる論文ばかりで、ぜひ多くの学校で検証をし議論をして頂きたいと期待しております。

ところで、具体的にどのような観点や方針のもとに審査しているのか尋ねられることがあります。何度か機会あるごとに断片的に述べてきましたが、ここで改めていくつかの観点を取り上げてみます。なお、次年度もこの続きを説明することとしています。

以下では、最後の【参考】のところに掲げてある評価項目の中からいくつかを選び、その観点について具体的に説明することにします。

1. 問題意識について

何を明らかにしようとしているのかの問題意識が明確であること、簡潔に表現されていてわかりやすいこと、それにはできるだけ簡潔に表現することが必要であると思います。

いい研究かどうかは、問題意識へのこだわりの強さだと思います。何年も同じテーマで継続している研究は、それだけ理論・実践の両面での粘り強さの証ではないでしょうか。

簡単に疑問が解け分かったと言わないで、粘り強くテーマに迫る姿勢が窺える研究は、問題意識の深まりと広がりが見え、読み応えがあるというのが審査委員一同の感想です。

2. テーマを展開する力をどう身に付けるか

児童生徒の指導に関して抱えている問題の解決を図るために、たとえばこれまでに積み重ねてきた実践上の工夫をもとに、ある観点からある方法で解決・改善を図ってみたいかどうかと考えます。その中に自分で学んだ研究者の考え方やそれに基づく実践の成果などを取り込むことも考えられます。それらを筋道立てて考えてみます。しかし、この段階はまだ「構想」の段階といってもよいと思います。

次に、そのために参考になる先行研究をできるだけ探す努力が必要です。論述に幅と深みを感じられる研究は、多分このあたりの違いかと思います。実際、独自なものがあると読み取れる研究とは、このような初期段階での一見ムダとも思えるような周辺の、間接的な作業も含めた事前の準備の違いによっても考えています。そのためにも、他の先生方の実践報告や研究論文や研究者の著作などにも時には目を通してよくとよいと考えます。

中には学習指導要領や指導書の内容の変更点とか中教審答申の重点事項等を研究の動機や出発点、研究の拠り所とする研究が少なくありません。しかし、参考にするのがそれだけでは研究の展開は広がりを欠いてしまいます。単なるコトバや概念の繰り返しや論理の堂々めぐりにならないように、コトバや概念や論理を「展開する力」を身に付けていく必要があります。それには、たとえば文と文をつなぐ「接続語」の使い方にも留意してほしいです。

接続語を意識的にしっかり使うと論旨がすっきりすると感じています。

3. 研究のプロセスについて

もうひとつ気になったことをあげると、せっかく色々と実践を積み上げているのに、読み手の側からすると、ややもすると実践の羅列という印象を与えてしまう論文が見受けられることです。これは、研究を通して何を明らかにしようとしているのか、研究のねらいがはっきりしていないこと、また全体の研究計画をしっかり立てないままに研究に入ってしまったためであると思われる。とにかく、自分は何を明らかにしたいのかを常に忘れないように意識しながら進めることが大事だと思います。

4. 仮説について

疑問に思っていることのひとつが仮説という言葉の使い方です。形だけの仮説ではないか。現状は、「もしも…ならば、…であろう」という一見「仮説」の形を装っているが、もう少し力を入れて検討してほしいと思っています。

また、仮説は最初のところに書けばよいのではないはず。仮説は執筆者が最初に表明した研究の約束事です。少なくともその姿勢を最後まで貫こうとしているかどうかも気になるところです。なお、必ずしも「仮説」という言葉でなくたとえば「研究の見通し」など他のわかりやすい用語でもよいのではないかとというのが審査委員一同の意見です。

【参考】評価の項目と観点の例について

評価項目	具体的な観点の例
1. どのような研究論文を期待するか	テーマ追求の自分なりの独自性と研究プロセス全体がマネジメントされているか
	本研究が他の学校・教師の実践研究に参考になることへの期待
	共同研究では学校内の研究的風土形成への期待が感じられるか
	研究から児童・生徒や学校・教師の姿や動きが伝わってくるか
2. 本研究の位置づけと他機関への応募について	研究計画全体における応募論文の位置づけは明確か
	本研究において過去に用いた研究の結果が再度使われている場合や他機関の募集等に応募している場合の位置づけ
3. 問題意識について	明確でわかりやすく、また簡潔に表現されているか
	問題意識へのこだわり、粘り強さ、継続性が見られるか。簡単に分かった、明らかになったと片付けない姿勢が見られるか
	関連する分野の研究にも目を通すなど問題意識に深まりと広がりがあるか
4. 研究全体の中での実践の位置づけについて	明らかになったこととならなかったことをはっきりさせ次の課題を展望する姿勢が見られるか
	実践記録の場合今後の研究計画への展開をもっているかどうか
	研究全体の中での実践の位置づけが明確か
5. 仮説について	仮説の書き方が形だけのものになっていないか
	研究を通して仮説を明らかにするとその姿勢が見られるか
6. 実証のあり方について	児童・生徒の、あるいは教師自身の感想等主観的な評価語を羅列することで実証されたとしていないか
	少数の対象者からのアンケート等の結果により児童・生徒に理解されたとするなど安易な実証主義に走っていないか
7. 論述について	構成が計画に沿い筋道が通って記述されている
	主語、述語がはっきりしている等文章が簡潔で読みやすい
	答申、指導書、先行研究等を自分の実践、自分の言葉で言い換えようとする姿勢が見られるか